
魔法少女の世界に転生とかしてみる

八雲家の使用人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女の世界に転生とかしてみる

【NZコード】

NZ0919N

【作者名】

八雲家の使用人

【あらすじ】

魔砲少女な世界に転生してしまった主人公。少年時代からやり直しになり、思うようにいかない日々。取り合えず、頑張って生きようと思います。能力微妙だけど。／／／／注意 この作品には、ハーレム・ご都合主義・主人公最強などの成分を含みます。そういうのが苦手な人はご退場ください。

転生とかしてみる（前書き）

はじめまして、八雲家の使用人です。

進む妄想が抑えられず、ついにやつてしまいました。反省はしている、だが後悔は（ry

ストーリーが適当すぎる。設定も適当。『都合主義』

批判お断りです。批判するなら読まないで下さい。

それでもおつけーね！な人はどうぞ先にお進みください。あなたが勇者か。

転生とかしてみる

日常とこつのは何事にも変えがたい大切なもので、変わることの無いもの。

そう考へていたのはこいつのことだつただらうつか？

まだ小さい小学生だつたが、それともヤンチャした中学生だつたか、はたまたアホした高校生の頃だつたか。

少なくとも、俺といつ存在ひとつで、普通とこつものぜんげんへ当たり前のじとで、変わらぬのない日常だつたはずだ。

俺といつ人間は、じんげんじにでもいる高校生 とは少し言
いがたい、オタクによくありがちな転生とこつものに憧れている男
だつた。

変わらぬ日々を過ぐし、家に帰つてはゲームやアニメ三昧。学
力は日々少しずつ低下していく、進路について日々悩む日常を送つ
ていた。

なりたいものや、夢はなく、田舎すものもない。そんな中で一次
創作でよく見かける転生などとこつたものは魅力的で、憧れた。

人生をやり直したい。やつぱりいたいことは一度や二度ではなく、日々そう考えていた。

だけれど、そんなことは現実になるはずもなく、日々同じようなことを機械的に繰り返す日々。

そんな日々だったが、少なくとも、そんな日々に満足していた。

だけれど、そんな日々は脆くも崩れ去り、自分が死んだと自覚することも無く、俺はあつといつまに命を落とした。

転生

べつやら、俺には転生をする権利が与えられたらしく。

もちろん、日々憧れていた夢のよつなじを断るはずもなく、転生をした。

運のいいこと、能力を与えられて、アニメを何度も見直した「魔法少女」の世界に転生されるらしい。

この時、テンション上がってあまり考えずに能力を口に出した俺を殴つてやりたい。能力には欠陥があった。

もらつた能力はこれだ。

ff 召喚獣などを召喚できる「召喚の才能」と ff 零式のセツナ卿並の召喚の才能、魔力を吸い取る「魔力吸收」。

あまり強大な力は渡せないとのことでの能力を選んだのだが、充分チートな筈のこの能力がOKとのことだったので、コレにした。直前までしていたゲームが ff だったので、たまたまこれしか思いつかなかつたというのも理由だが。

さて、この能力のどの辺りが欠陥能力かというと、召喚とはすなわち魔法である。魔法といふことは当然「魔力」がいるわけで。

ぶつちやけると、強大な召喚獣を召喚できるほどの魔力がなかつたのだ。具体的に言つと、魔導師ランクC+相当。

当然、強力な召喚獣なんて呼べやしない。そのための「魔力吸收」だつたのだが、こちらも欠陥能力だつた。

「魔力吸收」には条件がある。相手に触れること。それが大前提であり、そうしなければ吸收できやしない。

触れるためには近接格闘しなければならないし、そのためには強くないといけない。つまりは、どちらにしろ魔力が必要で、ろくに吸収できやしなかつた。

じゃあ、雑魚相手に吸収を繰り返していればいいかと聞かれれば、それも駄目だつた。

どういふことかといふと、魔力はあくまで吸収できるだけで、限界値 つまりは C + 以上の魔力を蓄えることはできなかつたといふことだ。現実は非常である。

悲劇はこれだけではなかつた。

俺という転生者は、親というものが存在しなかつた。

9歳ぐらいの縮んだ体に転生し、気がついたら高層ビルの立ち並ぶ、ミッドタウンと思わしきといひにいた。

当然、お金なんてものがあるはずも無く、サービスと思わしきハッシュド語を理解できたのは良かつたが、文字を書くことができなかつた。

路地裏を彷徨つていると、大人の管理局員と思わしき人たちが現れ、助かつた なんて最初は思つたりしたが、地獄の始まりの間違いだつた。

思い出して欲しい。管理局の上層部が何をしていたか。

連れて行かれて先ずやらされたのはスキャンである。早い話が、

魔導師適正があるか、片つ端から調べられたのだ。何人もの子供がスキンされ、適正ありと適正なしに仕分けされる。

適正なしひどいかに連れて行かれ、適正ありにはデバイスが支給された。

「今から、貴様らには仕事をしてもらう。よく働いた者には衣・食・住を保障してやるが、役にたたん奴らは研究所行きだ。死なない程度に頑張ることだな。」

デバイスを手にした俺達に、言われた言葉はこれだけだった。

その場できちんと理解できていたのは恐らく、外見とは違う精神を持つ俺だけだつただろう。

安物のストレージデバイスを手にした俺達は、バリアジャケットと簡単な魔力弾、それとバリアの仕方だけを教えてもらい、すぐさま仕事に放り込まれた。

目にしたのはまさしく殺し合い。

非殺傷設定なんてものはないかのごとく、魔法が飛び交い、周りの子供、少年、大人が傷つき、倒れていく。敵は質量兵器を使ってきたり、魔法魔導士だったり、とにかく非殺傷なんて生温いことは

言つてられなかつた。

殺らなきや、殺られる。そんな世界。

後々考えたのだが、俺は運がよかつたのだろう。C+という魔力、レアスキル有りとのことで周りより多少魔法を学習されたストレージのデバイス、「魔力吸收」という魔力を長持ちさせるレアスキルに召喚魔法。召喚魔法に関しては、さすがはセツナ卿とすべきか、簡単な召喚魔法なら使えることができた。

コレだけあつて、生き残るのが精一杯。他人を蹴落とし、のし上がり、ようやくできた僅かな余裕も全て戦闘訓練に使わなければ生き残ることすらままたらない日々。

原作介入なんて考えれる余裕なんてあるはずもなく、そこにある知識から少しでも強くなろうと足搔かなければいけない。

転生なんてしなければよかつた。

そう思つよつてなるまで、時間はからなかつた。

転生とかしてみる（後書き）

取り合えず、一区切り。

もひ、内容が適当すぎるｗｗｗたすがのりとトランシショソンとその場の思いつきで構成されてるだけあるわｗｗｗｗ

なんかシリアスっぽいこと描いてあるけど、実際そんな小説にならないかも。

誤字などあれば、報告してください。誤字訂正評がある俺ですから。

びひひひひなつたｗ

謎の機械とか戦つてみる（前書き）

2話目を投下。

別にそんなにストックとか作ってるわけじゃ なにかど。

超展開になるかも。

謎の機械とか戦つてみる

「慣れる」

人間とは恐ろしい生き物である。

他の生き物とは違い、高い学習能力を持ち、自我を確立させて思考することができる。

2年。

この世界に来てから、それだけの年月が経つた。相変わらず、俺達のような存在の日常は変わらないもので、生きるか死ぬかの世界を彷徨っていた。

魔力は魔導師ランクBランク相当になっていた。さすがは成長期といつべきか。酷使しすぎたせいといつべきか。

地上部隊の対違法魔導師部隊所属レンヤ・カワカミ 三等陸士。魔導師ランクは陸戦魔導師Cランク。

それが俺の今の肩書きであり、2年の成果でもある。

「対違法魔導師部隊」

その名の通り、違法魔導師を取り締まる部隊であり、俺の所属する糞部隊である。

発足したのは結構最近のことで、そんなに長い間あるわけではないが、どこのどの権力者がもつと上にのじ上がりたいがために出来た部隊である。

無茶いって作ったため、規模も小さく、予算なんて唯でさえ資金不足な陸に、こんな部隊まで回す金などある筈もなく、雀の涙ほど。

そのため、人材を雇えるはずも無く、それでも上に行きたかった上司がやつたのは、路頭を迷う子供を使うこと。

魔導師適正を調べて、適性あれば儲け物。なければ研究所に売りとばすという方法で金にするという違法手段にでた部隊であり、けれど、世間はそんなことは知らない。対違法魔導師部隊が犯罪を犯してどうするんだか。

対違法魔導師部隊といつても、活躍しているわけでもないので、仕事はえり好みせず表では派遣任務とかで他の部隊に行ったり、人材不足のところを手伝つたりしており、世間的な認識は「便利屋部隊」。

もちろん、労働基準法?なにそれおいしいの?と、地球の自分が言いたくなるくらいの重労働で違法魔導師の依頼があれば、それもきちんとこなしている。

陸戦C、魔力はB相当の俺は、完璧な戦力扱いで、違法魔導師の取り締まりや、ランクにあわない任務など、もっぱら年中戦闘のしつぱなしで、何度も倒れた経験があるが、治療が終わり次第即戦場行きと、死線をさまよつてばっかりだが。

俺のやつてきたことをそのまま俺の功績にしたのならば、もとと上にいた筈 なのだが、そこは上司が見事に搔つ攫つていつており、いまだに三等陸士。恐らく、このままあがることははないだろう。

新暦67年 冬

11歳になつた俺は、今日も今日とて死線をさまよつ。

今回の任務は、とある世界での足止め任務。

数が相当いる正体不明の機械（ガジェットと思わしき敵）との戦闘が俺達の任務なのだが、陸戦Cである俺が最高戦力というまさしく自滅しにきたような任務であり、本格的に使い捨てるつもりなのだろう。

上にとつて、俺達価値のないクズのよつな魔導師はポイ捨てるゴミと同程度なのだろう。

バンバンと激しい音がなり、あちこちで戦闘が始まる。

「オラッ！」

『ブリッツアクション』

俺は軽い掛け声とともに、手に持つ剣型アームドデバイスを振る。その特定動作に反応してデバイス無機質な機会音声をだし、腕の振りなどを高速化させる魔法であるブリッツアクションを発動させる。ガキンッと、剣がガジェットと衝突し一瞬抵抗するも、前世よりも遥かに高くなつた身体能力でごり押しし、剣を振りきる。

その場に立ち止まつていると、他から攻撃されるのですぐさまその場を離れると、倒したガジェットが爆発し、焼け跡を地面に残す。

「やつぱり、ガジェットか 」

付近にガジェットが居なくなつたので、AMFの効果がなくなり、魔力の消費効率の良くなつた身体強化を途切れ途切れに発動させ、次の敵の居場所へ向かう。

すれ違ひ様に、近くに居たガジェット？型を、ブリッツアクションで加速した攻撃で破壊していく。

え？ AMF内では魔法の発動は出来ないんじゃないかつて？

それにはきちんと理由がある。それは、魔力をできるだけ圧縮させて魔法を使っているからだ。

つまり、魔力が完全にかき消される前に、魔法を発動してしまう。そうすれば、例えば「ブリッツアクション」なんかは、加速した後は魔法をかき消されようとスピードを維持するだけでいいので、火力はあがる。

投げたボールは、その後力を加えてやらなくて済まつてしまつ。く。それと同じだ。

移動を続け、目の前に現れたのは？型が5機。

「これはちよつときついかな。 しじつがない、魔法を使つか。

「揺らめく焰、猛追！」

『ファイアボール』

詠唱文を使い、魔法を起動させ発動する。足元にはミシード式でもベルカ式でもない召喚魔法特有の魔方陣が展開され、魔法が出現した。

眼前に現れたのは5つの炎球。真っ直ぐ飛ぶように加速した炎球はガジェットに直撃に、かき消されることなく破壊する。

これは俺が生き残るために編み出した魔法の一つだ。

俺の召喚魔法は、なにも**召唤獸**だけに適用されるわけではない。それを応用し、他世界から精靈を召喚、使役し、魔法を発現させる。

この時発現した魔法は、精靈の力を借りた自然現象。なのでAMFは効かないのだ。詠唱は特に決まっておらず、自分のイメージにあつた文にするとより強い力が顕現する。

え？詠唱文がどこかで効いたことあるって？気にしない、気にしない！

「 はあ、やっぱりガジェット相手はやりづらいか。魔力のない機械だから魔力吸収ができないし あんまり調子に乗つてると魔力が尽きるな。」

剣の構えを一度解き辺りを見渡すが、辺りには何もない。

どうやら、ここいらはあらかた片付いたみたいだな。 まあ、この辺はあんまりいなかつたし、仲間が心配だ。できるだけすぐ戻つた方がいいだろう。

俺はそう判断して踵を返し、仲間の下に向かっていくが、そこで足を止めることになった。

『全員撤退しろ、繰り返す。全員早急に撤退しろ。』

突如飛んできた念話に足を止め、思わず本部があるであらうといふ

を睨みつける。

『戦闘不能者はいつも通りこちらで全員回収する。正体不明の機械は残っているだろうが、気にせず早急に撤退しろ。管理局本局期待のエース様のご登場だ。』

本局期待のエース様 ああ、主人公の高町なのはか。まあ、二ちらとしては助かったがな。

回収。いつもの生命力を使った転移魔法か。

俺の所属する対違法魔導師部隊には、転移の力もつたペンドントが支給されている。それはなぜか。

簡単な話、部下を捨て駒にして違法行為をしていることをバラしたくない上司を作った、使用者の生命力を吸収し発動させる転移魔法だ。転移先は本部で、死ぬ直前になると根こそぎ魔力を奪い取り、強制的に発動させる魔法だ。死体を回収し、隠蔽するために。

上司はそこの所は才能あつたみたいで、大量生産はできないが、人數の少ない俺達の分くらいは作れるらしい。忌々しいことに、死体からペンドントを回収し再利用。これで抜け穴の分も困らないってやつだ。

本当に、嫌な部隊だ。これだから嫌いなんだ、管理局は。

謎の機械とか戦つてみる（後書き）

どうしてこうなったw

私はアニメしか見てません。間違った知識等あれば、お指摘ください。

無理やり修正します。

疑問点などあれば、どうぞ感想まで。

原作介入とかしてみる（前書き）

3話目投下。

今日はこれが最後です。

原作介入とかしてみる

走る。

撤退命令が出たので、所々効率的に魔力で身体強化をしながら高速移動し、雪の積もっている大地を駆け抜ける。

本部までの距離が近くなってきたのだが 少々離れすぎたか。

「？」

違和感を感じ、空を見上げる。

エリアサーチを使いたい所だが、あまり魔力を使ってられない。もつたいたいからだ。

さて、どうしようか。と悩んでいると、本部から念話が届いてきた。

『何をやっている!! 結界なんぞに捕まりおつて!!』

ああ、そうか。この違和感は結界か。

だとすると、周りに被害を出さないようにするためかな。白い悪魔様が魔砲を撃つと、しゃれにならない被害になるしな

内の部隊にも是非ともほしいところだ。そんな結界張れる結界魔導師が、内にいるわけないしな。

『ちつ！「レだけ頑固な結界だと、破壊しないで転移は無理だ。仕方ない、貴様は援護でもして活躍してこい。幸い、便利屋部隊呼ばわりの俺達の部隊なら、いても問題ないだろ。』』

『了解しました。』

俺は走るスピードを落とし、耳をすませて戦闘しているであらう方向を見極める。

まったく、面倒なことに巻き込まれたもんだぜ。

所変わつて戦闘場所。

そんなに離れていなかつたよつで、走り出してすぐに到着した。まあ、結界の範囲内なんだし、そんなに離れているわけがないのだが。

ドガソツードガツドガソツー！

「 派手にやつてるな。 なんだあの馬鹿魔力は？」

到着したと同時に目に入つたのは、極太桃色閃光ビーム。アホほど魔力を撒き散らし、ガジェットのAMFを問答無用で突破して、シューティングゲームの雑魚キャラを打ち落とすかの『ごく破壊していく白いバリアジャケットのツインテール少女。その近くには、ガジェットを打ち碎くように破壊するチビっ子もいる。

いや、チビっ子は失礼か。

「無駄に空中の魔素濃度が濃い 。 これなら、空中にも立てそうだ。」

脳内で術式を組み立て、レアスキルを応用し、魔素を足元に集めて固める。

魔力で軽く身体を強化し、ジャンプした後、そのまま空中に立ち、さらにもう一段ジャンプ。それを繰り返し少女達の下へ跳んだ。

「助太刀、しましょうか？」

突然話かけられたにも関わらず、ヴィータと思わしき少女はビクリともしなかつた。流石は百戦錬磨の騎士。恐らく気配で気づいたのだろう。

「 お前、エリのビートだ。」

「 ひらを振り向かず、鉄球を呼び出し、手持ちの武器をフルスイング。打ち出された鉄球はガジェットを打ち抜き、撃墜する。」

見事なコントロールだな。

「 地上部隊の対違法魔導師部隊所属レンヤ・カワカミ 三等陸士です。」

「 便利屋部隊か。何で便利屋部隊の三等陸士がこんなところにいるんだ？」

「 任務の途中に結界に巻き込まれて、戦闘しているようなので加勢に。」

「 ようやくひらを向いたヴィータ（仮）はジーッとひらを見たあと、再び前を向いた。

「 嘘はついてないみたいだな。あたしは武装隊の特務捜査官補佐のヴィータだ。武装隊の演習で来ていたんだが、帰還の途中で襲撃された。」

なるほど。俺達の部隊は、高町達に襲撃しようとしていたガジェットを見つけて攻撃。倒しきる前に高町達がやつてきて、ガジェットはそつちを襲撃。あの糞上司は、それを高町達が倒しにやつてきたと勘違いしたわけか。

「それで、お前。魔導師ランクは何だ？飛行してることはない、それなりだと思うが。」

「陸戦Cです。」

「はあー…おま、そんなんにこいにきたのかー…どうせひつて飛んでるー…」

「魔力を足場にします。早い話がレアスキルですね。」

「すつこんでろ！奴らAMFを使ってくるみたいだ。陸戦Cなんかで敵うと思つてんのか！？後はあたしらがやつとくから！」

「これからエリートは。」

ランク、ランク。ランクと実力は関係ないだろうが。

そりや、普通は関係あるかもしけないが、あくまで普通ならだ。俺の場合は力の功績も正等評価されてないし、力が特殊だ。多分総合B+ぐらにはあると思つ。

相性もあるし、ガジェット？型程度に遅れをとるつもりはない。

「 セウはいいますけど 」

「 いいからセウセウ 」

軽く右手を横向きに突き出し、魔法を発動の用意をする。

レアスキルを発動。術式にねじ込み、魔力結合阻害を力技で突破し、圧縮する。

空気中の無駄に濃い魔素を吸収し、右手に集め、術式に魔力をながし、魔法陣に魔力を留める。消費した魔力はさらに吸収で補給に、流し込む。コレを繰り返すことでの大技が可能になる。編み出した応用の一つだ。ただし、今回みたいに無駄に空気中に魔素がないと使えないけどな。

因みに、スタートライトを参考に思いつきました。

充分魔力が溜まつたところで、2メートルくらいの魔法陣が右手に顯現する。

「 ひつこん で? 」

ヴィータが啞然としてこちらを見ている。

使えない雑魚かと思いきや、いきなり大技っぽい魔法を行使しそうとすれば、まあそうなるわな。普通。

「創世の火を胸に抱く灼熱の王

」

詠唱文は、本来存在しない。精霊の力を借りた魔法、仮に「精霊魔法」としよう。精霊魔法と同じで、イメージが大事なのだ。決まつた文はいらない。より正確にイメージすることにより、消費魔力は変わる。

「 灰塵に化せ！出て來い。『イフリート』」

『コール サモン イフリート』

魔法陣が眩い光を放ち、顯現されたのは炎。

灼熱の炎は形を変え、変化し、炎の魔人へと姿を変える。

「殺れ、イフリート。『地獄の火炎』だ。」

顯現したイフリートは俺から魔力を奪つていき、炎を収束させ、解き放つた。

広範囲にばら撒かれた火炎は、機械を焼き尽くし、破壊する。

「

「（やつべ、思つたより魔力を持つていかれるな。コレで魔力C級の召喚獣かよ 通常の俺なら5分も持たないぞ。）」

唖然としているヴィータを見ながらそんなことを考えていた俺だが、思ったより魔力を持っていかれて結構焦つていたりする。

この状態でもう一体の方の召喚獣を維持できるかどうか

「それで、俺が何をすれば？」

「あ、ああ。このままある程度破壊を頼む。」

「了解！」

ヴィータの返事を聞いた俺は、イフリートを単身で突っ込ませた。

あんな魔力を喰らう技なんか、何度も使えるかつての

その後の俺は、イフリートを維持した状態でちまちまと攻撃し、辺りのガジェットを破壊した。

相変わらず桃色閃光は飛びかっていたので、いつ巻き込まれるかひやひやしたが。 射程長すぎなんだよ！味方巻き込む気か！！

「おー、わっち終わったか?」

「戦闘終了したので、顕現せさせていたイフリートを還してこないと、後ろから声を掛けられた。」

考えるまでもない。ヴィータだ。

「「JWJは終了」です。武装隊の皆さんも無事みたいですし、一見落着ですかね?」

「そうか、助かった。礼を言ひ。AMFがあつたからな。あたしらだけじゃ時間が掛かつただろ?」

「あ、ヴィータちゃん! 大丈夫だつた? 心配したのー。」

俺がヴィータのお礼に返事を返すと、ヴィータの後ろから奴がやつてきた。

白い魔魔である。

「それは、JWJのセリフだぞ、なのはー! 毎回無茶しやがつて。大体、AMFを砲撃で無理やり突破するなんて何を考えてるんだ。」

「こやははは、出来そつだつたから」

「せつこつ問題じやねーーーJの際立つ「あのー?」

「いまあたしは、なのはと話してゐんだ。」

なんだ?」

「いや、やつじやなくて。そちらむんせびなですか？」

もちろん、俺が言つてこるのは高町のことである。

一応知つてゐるが、不審がられなによつてな。

「ん？ ああ、そうかお前は知らなかつたな。こいつは

」

「高町なのはつて、よろしくね、えつと
す。レンヤ・カワカミ。」レンヤくん、「

なんだか知らないけど、名前を嬉しそうに呼ばれた。訳分からん。

それと、ヴィータ。俺が知つてゐるはずないじゃないか。普通
は、紹介くらうするのが普通だと思うんだが。別段知りたい訳でも
ないけど。

さて、この時点ではすっかり忘れていた。この時起つて出
来事を。だから反応が遅れてしまつたのかもしない。

高町の後ろから迫る、ステルス機能と騎士服を易々と貫く攻撃力
を有するガジェット？型の存在に。

「ツー高町ツー後ろだ！」

「え？」

高町とヴィーダが俺の声に反応して俺の方から顔を逸らし後ろを向くと、近くまで迫っている蜘蛛に似た多脚ガジェット。脚を振りかぶり、今にも突き刺しそうだ。

「 ッー？」

そう、この時点なら、高町のアホみたいに硬いバリアが間に合つはずだった。そう、はずだった。

急に加速し振り向きながら魔力を練り上げるその動作。それが、負担だらけでボロボロだったリンクアーコアを刺激し、高町に硬直を与えた。

「なのはー!？」

「くわーーー！」

そのとき、俺はやつと想い出した。高町なのは撃墜事件を。

何で思い出さなかつたのか、数分前の自分を殴り飛ばしてやりたい。

Hリートは嫌いだ。優秀だし、自分に出来ないようなことを平然とやってのけるし、いろいろの気持ちを理解してくれないし。

だけれど、自分には見捨てるという選択ができなかつた。

何か抵抗したわけでもなく俺はあつさり死に、転生先では自分が無力なばかりに周りで死んでいくやつがいる。

ズルしてもらつた能力を使って、一度死んだ身で周りを見捨てて生きていぐ。そんな自分の罪滅ぼしの自己満足かもしれない。だけど、目の前で助けられる分のことくらい、やってもいいだろ？

いつもは無理だけど、今は空氣中に魔素がいっぱいあるから。

3回の動作、ソレに反応して、まだ解除していなかつたデバイスが反応する。

『アクセルファイン ブリッジアクション ソニックムーブ』

速度強化系の魔法の三重掛け。普段なら一気に減る魔力で氣絶だとかするけど、そのうち一つは魔素で肩代わりしている。

視界が変わる。あまりの速さに、強化している視力が追いついていない。そんな中で高町だけ抱えるとか器用なことはできなくて。

出来たのは、何故か頭に直撃コースの脚から盾になつて腹をぶつ刺されることだった。

激痛が腹を襲い、血が大量に腹から噴き出して、意識を失いかける。

刺さった脚を、振り払つように振り回され、脚から取れた俺は地面に落ちていく。

無様だなあ。俺。

原作介入とかしてみる（後書き）

相変わらず超展開。

ちょっととしたら設定もだそつかと。

これって読む人いるのか？

12 / 4 詠唱修正

入院とかしてみる（前書き）

思つたより読まれていて少し啞然。

だが、フリーダムにやつてこくつもり。誤つた表現とかあれば言つてください。

作者、現代文赤点ストレスレです（笑）

他の教科もだけど

入院とかしてみる

突然やつてきたやり直しの機会。

馬鹿やつて大した力はもらえなかつたし、つらいこともたくさんあつたけど、それでも後悔はしていない。

原作介入とやらを反射的にやつてみたけど、代わりに自分は瀕死の重傷。

もう絶対やらねえ。

魔法少女リリカルなのは Strike シーズン始まります。

「 知らない天井だ。 」

目が覚めると、真っ白な天井の部屋に横たわっていた。

取り合えず、テンプレ的な台詞を言ってみた俺だが、状況を把握できず、混乱してしまつ。

結構な量の機材に囲まれていて、心音を表しているであろう機会音が、無音の病室を満たしていく。

「 ここは病院 なのか? 」

おかしい。

具体的に何がおかしいかといつと、ちゃんとした機材が揃っていることである。

万年金欠の俺の部隊に、こんなところに長期入院させるような余裕はないはずだ。それに、死に掛けていた俺が回収されていないのもおかしい。

「 あら? 起きたかしら? 」

「 ツー? 」

俺しかいないはずの病室から声がしたので、思わずビクリと跳ね起き、そちらを振り向く。

そこには女性がいた。いや、俺はこの人を知っている。何度も写真を見せながら上司が何か言っていたのを覚えている。

「あんまり激しく動いちゃダメよ？絶対安静なんだから。」

「　　リングディ提督。」

リングディ・ハラオウン。

それが彼女の名前で、原作にも登場していた主要人物だった一人だ。

高町なのはを会話誘導で管理局の戦力とした張本人。

それだと、彼女がここにいる理由が分からぬ。彼女は海の箇だ。一介の三等陸士の病室に来て何を考えている？

「ふふふ。そんなに警戒しないで頂戴。現状説明を任せただけよ。」

「　　そうですか。」

怪しい。余計に怪しい。本当に何考えてやがる。

「現場の收拾は、あの場にいた武装隊が抑えたわ。謎の機械　仮名称ガジェット・ドローンは破壊、重症の貴方どなのはさんに応急処置を施してこの病院に運び込んだのよ。」

なるほど。回収されてないかと思つたら、そういうことか。

俺が怪我していたのは腹であり、それらの治療や処置を施すために、首にかけていたペンダントを外したんだろう。そうなれば俺を回収することはできない。

「貴方が撃墜された後、すぐになのはさんも撃墜されたから、皆慌ててて。ちょっと事態の收拾に時間がかかったのよ。」

「そうですか。」

「あまり驚かないのね？」

「何がですか？」

「なのはさんはさんが撃墜されたこと。まるで知っていたみたいだから。」

「正直言いますと、予想通りってところですかね。」

「予想通り？」

俺の言葉に、リングディ提督の目が細まった。

いや、予想通りってのは原作云々は関係なしに予想通りだね。俺が血を噴き出しながら落ちていくのを顔面蒼白になつて見ていたし。あんなんじや、とても防御なんて行動がとれる筈がない。

その点、ヴィータは流石はヴォルケンリッターといったところか。俺の血飛沫に見ても動搖していただけみたいだし、あの場を收拾したのも彼女だろ？。

「はー。自分が血を噴き出しながら落ちていくのを見て、顔面真っ青にしてましたし。」

「 それもそうね。ごめんなさい、変なこと聞っちゃって。あんな部隊に所属していたみたいだったから。」

「いえ、自分も言ひ方を氣をつけるべきでした。 ん？」

あんな部隊？

俺は、周囲の時間が停止したよつて感じた。

俺のいた部隊は、あんな呼ばわりされて疑われるような部隊だつただろ？

実態はそつだつたが、世間的には違つ。 といつてはつまつ

「あなたの部隊、調べさせてもらつたわ。 あんなペンドントを持っているみたいだつたから。」

「 そうですか。」

バレているところと他ならない。

まあ、部隊 자체は別にどうでもいいんだけどさ。

「それで、自分の処遇は？」

問題なのは、自分のことである。

強制的にやらせられていたとはいえ、不法侵入や器物破損なんてざらにあつたし、そんなに多い頻度ではなかつたが 人殺しもした。

これだけやつとして、無実に近いのはありえないだらう。

「 地上本部直営の犯罪者更生部隊に異動。そこで5年の無料奉仕。あと魔導師ランクの破棄及び階級は訓練生と同じ扱いだそうよ。」

「 よつじょつて自殺部隊ですか。」

自殺部隊、そう呼ばれている部隊で、局で犯罪を起こした犯罪者の勤める部隊であり、他の犯罪者を取り締まる部隊でもある。

そもそも、犯罪者更生部隊とは何なのか。

まず、管理局が絶対正義の名の下にあるところとを前提として

聞いて欲しい。実態はともかくとして。

さて、まずは正義の味方が犯罪者をどう扱つかを考えてはもらえないだろ？ 特撮ヒーロー物でもいいし、王道バトルものでもいい。正義の味方が活躍して、戦つて、悪を倒した後その悪はどうなるか。

物語の内容にもよるが、捕まえたりして悪を殺さなかつた場合を考えてもいい。例えば俺の居る世界「魔法少女」の世界では、*Strike*rsの時の悪であるスカさんは監獄にぶち込まれた。だけれどナンバーズの一部除いたメンバーは更生施設に入れられている。

そう、つまり正義は悪をも見捨てないのだ。

では、である。俺達のような人殺し犯罪者　　とくに重罪死刑級の奴らはどうなるか。

答えは更生と称して危険な仕事をやらせるのである。そして仕事中で死んでくれれば殉職扱い、仕事をこなせばありがたい程度に考える。そうした考えの下にできたのが犯罪者更生部隊である。

ようするに死ににいくのと変わらないのだ。破棄される前の魔導師ランクを基準とし、その2つから3つぐらい上のレベルの仕事をやらされるらしい。

だけれど、おかしい。どう考えても、俺のやつたことレベルでは犯罪者更生部隊に5年も入れられる筈がないのだ。強制的に

やらされていた、まだ比較的に子供であること。これらのことを考えると、重罪になつても、犯罪者更生部隊に入れられるほどではない。

そもそも、あそこは狂人レベルの殺人快楽者が入れられるようなところである。

「『めんなさい！』

俺の思つていた疑問が顔に表れていたのだろうか。リンクティ提督は俺に対して頭を下げてきた。

「……………どうして、貴女が謝るんですか？」

「本来なら、貴方はそこまで重罪にはならない筈だったのよ……………」

それはそうだろう。俺くらいのやつであそこの部隊に入れられたら、死体処理班がいくつあつても足りない。

「貴方、なのはさんを庇つて怪我をしたでしょ？それが問題だったのよ。」

「……………どうしたことですか？」

「なのはさんは撃墜されたつて言つたでしょ？あの子、あれでも将来は有望視されてるの。」

もうこいつとか。

「これで納得がいったぜ。要するに、上のやつらは俺なんかがどうなろうとも、高町の経歷に泥がつくほうがいやなんだな。」

「要するに、俺は捨て駒にされたってことですね？」

「じめんなさい。あなたを庇いきれなかつたわ。」

「別に、貴方は庇ってくれた。その事実さえあれば、嬉しいです。」

「せめて、何か映像でも残つていればよかつたのだけれど。」

「目撃者が一人だけじゃ信じてくれなかつたでしょ？」

さて、現状の説明をしようか。

高町なのは及び俺はガジェット？型により撃墜された。一人は重症、恐らく原作通り高町は飛べなくなつてているだろう。たくさん無茶やつてきて唯でさえリンクアコアがボロボロだつたんだ。今回の事件がトリガーだつたんだろうな。

世間的な認識は、エース様が変な一般局員と共に撃墜されたってところか。ここで重要なのは、どちらが庇つたのかがわからないことだ。

本来、高町の経歷には、馬鹿やつて一度飛べなくなり、他人を巻き込み自滅した。と載る筈である。が、上が将来の輝かしいエース様の経歷にそんなものが載るのを許すはずも無く、事実を隠蔽する。

高町が自滅したのではなく、一緒に落ちた同僚が自滅して高町はそれを庇つたんだと。リンカー・コアの件は、高町が馬鹿やつていたのではなく、襲撃された敵の攻撃のせいにしてしまえばいいんだと。その上、俺自身は犯罪やつていた部隊の所属だ。丁度よかつたんだろう。

決め手は映像が全く残つていなかつたのだ。それに関しては俺が原因である。

「俺自身は、そんなに強くないんですよ。魔力も低いし、特定条件下のみでしか実力を發揮できない。だけれど、周りはそんなことを知らない。」

「だから映像を消したのね。」

「いぐらり田撃者がいても、よっぽど親しくないと信じられないような内容ですしね。」

「でも、どうやって?」

「……こいつですよ。出ておいでフィー。」

俺の言葉とともに、俺のデバイスがおいてあると思わしきといひ

から、明るい光の玉が飛び出して、一直線に俺に向かって飛んでくる。

飛んできた光の玉は、元気よく俺の周りをビュンビュンと飛び回り、やがて俺の頭の前に落ち着いた。

リングディ提督を見ると、唖然としている。

「電子精霊のフリーです。」

「その子を使つたの？」

俺の言葉に、宙に浮いている光の玉を、不思議そうに見つめるリングディ提督。

電子精霊とは何か。

俺が電子精霊の存在を知つたのは、無限書庫に、映像などの隠蔽をできる存在がいなか探しに行つた時である。

彼らは精霊といつ存在でありながら、電腦世界 ようするに電子機器などに宿り、機械系やネットワークの情報操作を出来る存在である。精霊という存在なので、魔力を与えてやればそれなりに働いてくれるし、光の玉のようになに実体化もできる。

機械系の映像消去は言つまでも無く、デバイスの映像記録すら書き換えてくれるのだ。使用魔力も低く、ロウリスク・ハイリターン。俺にはありがたい存在である

俺から説明を聞いたリンディさんは、ますます不思議そうにフィーを見つめる。あ、フィーが俺の後ろに隠れた。

「用件はそれだけですか？」

ええ。伝えることは伝えたわ。

そう言ひて出て行こうと立ち上がつたリンディ提督だが、出て行きずりそうに立ち止まつた。

「どうしたんですか？」

あなたは、死ぬのが怖くないの?」

怖くないといふたら嘘になりますね。

「たゞ、とても

ナレッジマネジメント

1

「一人にしてください！」

リングディ提督は、俺が拳を握っているのに気づいたのだろう。何も言わずに出て行ってくれた。

それを確認にた俺は、握っていた拳をベットに呑みつけた。柔らかい布団の感触がして、ベットが軋んだ音をだす。

「 うつ うつ 」

悔しかった。何で自分ばかりこんな田にあわなくつこけないんだと。

善意で助けたのに、それがこの様だ。管理局の上層部はとにかく俺が嫌いらしい。

いや、高町達は悪くないんだ。悪いのは自分のことしか考えない上層部で、何もしない彼女たちに当たつたといひでハツ当たりでしかない。

説明したら、罪悪感を感じて、罵つたら自分が悪かつたと謝つてくれるだろう。だけれど、そんなことしても意味はない。

だからこそ、悔しかった。

入院とかしてみる（後書き）

相変わらずの超展開。

次回はなのはさん視点で書いてみるつもり。

フラグの立て方が雑すぎるwww流石俺www

少女視点、フラグとか立ててみる（前書き）

いつも、本日2話目の投稿です

現実逃避をしていたら、进る妄想が抑えられなかつた。気がついたら1話分書きあがつてゐる　だと！？

毎回2・3000字を田安に書いてるのに、気が付いたら4000字越してゐる。何故だ。

なのは視点で相変わらず超展開です。

主人公が適当にフラグを立てます。

そんな簡単にフラグが立つたら、俺はとつくの昔にリア充だわ！！！
！！つてのがあるので、そういうのが駄目なら見ない方がいいです。
それでも。okな貴方は同志だ。

少女視点、フラグとか立ててみる

田の前で落ちていく同じ年ぐらいの男の子。

私はどうやら底われたみたいで、血の気が引いた。

彼はどうしてこんなだらうか？

立ち止まりたいこともあるけれど、それでもやっぱり進むしかない。

魔法少女リリカルなのはStrikerS始まります。

「空はもう、飛べないだらう。」

田の前で自分を庇つて落ちていく彼を見て、呆然としていた私も落とされて、田が覚めた病院で言われた一言だった。

聞いたときは、頭が真っ白になつて。とても信じる」となんて出来なくて。

だけれどやっぱり現実で。

1週間。

私が病院に入院して、それだけの日にちが過ぎていた。

私の入院をリンディさんから聞いた様子のお父さん達やフレイト
ちゃん達も駆けつけてきて、心配してくれて、皆で泣いて。

彼はどうなったか。それだけが気がかりで、私が聞くとフレイト
ちゃんが怒ったように話してくれた。

彼が撃墜されたのは私のせいではなく彼が自滅したからで、私は
それを庇つたこと。

彼がいたのは犯罪をしている部隊で、彼は犯罪者更生の部隊に行
くことのこと。

自分で言つのもなんだけど、あれだけ怒つたのは、久しづり
だつたと思う。

最初は恐らく事情を知らなくて、一緒に呆然としていたヴィータ
ちゃんも一緒になつて叫んで。

それは違う。彼は何も悪くない。悪いのは無茶した自分だ。

フロイトちゃん達は信じてくれたけど、周りの人たちは全然信じてくれなかつた。映像が残つてなかつたのがいけなかつたのかな?

最初の3日は立ち直れずボーッとしていたけれど、ここ最近はリハビリを頑張つてます。

もう一度、空を飛びたい。

「 ッ！」

少し足に力を入れて、左右の棒に手を突き立ち上がってみるけど、次の瞬間には激痛が走り、倒れてしまった。

隣に控えていた看護士さんが私を支えてくれて、地面に倒れることはなかつたけれど。

「うーん やっぱりこれ以上は 。高町さん、少し休憩しましょ。」

「え、まだできます！」

「いいから、ほひ。お医者さんとの話は聞いておくのー。」

支えられていた体を車椅子に強制的に戻されてしまつて、リハビリ施設から遠ざけられてしまつた。

むう、体が不自由なのは不便なの。はやでちゃんも、こんな気持

ちだつたのかな？

看護士さんに、どこか行きたい場所はないかと聞かれたので、私はリハビリ施設と答えたのだけれど、却下されてしまった。しかたがないので、風に当たりたかつたから屋上に運んでもらつた。

屋上に着くと、看護士さんはちょっとお仕事があるから、ここでじつとしてるのよ？と言つた後、出て行つてしまつた。チャンスなの。

車椅子を端に寄せて、フェンスに手をかけ立ち上がる。手の力を緩めないよつにつかまりながら、一步を踏み出し歩き出す。

「 何してんだ？」

「 いやー？」

突然後ろから声をかけられて、思わず力を緩めてバランスを崩してしまい、前のめりの倒れてしまつ。

「おひどい。」

が、後ろからお腹に手を回され、支えられた。

誰だらう、と顔を上げてみると、そこには私を庇つた彼がいた。

血の気が引いていくのを感じる。今もつとも会いたくない人物にあってしまった。

「俺の言えることじやないが、怪我人は大人しくしてろ。 ちょ
つと失礼。」

「え？ きやあつ！」

言いたいことを言い終えた彼は、私を支えたままの腕をそのままにして、新たに腕を私の足に回して一気に私を持ち上げた。

重たくないだろうか？

「え、 ちょ ふえ？」

「はーい、 文句はあとで受け付けまーす。」

所謂お姫様抱っこ状態になつた私は、彼に運ばれ車椅子に強制的に戻される。途中、引いたばかりの血の気が今度は上つて顔が真っ赤になつてじたばたと暴れてみたが、どうしようもなかつた。

完璧に子供扱いされてるの。

車椅子に私を戻した彼は、車椅子に手を掛けて、フェンスと私を引き離した。あう、貴重なリハビリ時間がつ。

「それで、こんなとこで何してたんだ？まあ、理由は大体検討がつくけど。」

「む、それはちょっと失礼なの。なのは、そんなに分かりやすくな
いもん。」

「リハビリ止められた ちょっと休憩 看護士さんがどこかに行く
よしチャンス！ だろ？」

「あう」

言い返せない自分が憎いの。

「そういうレンヤ君は何やつてるの？」

「 注射って、痛いよね。」

「それって私よりもダメだよね！？」

それにしてもレンヤ君、注射が怖いなんて。ちょっと意外な。大人っぽいし、何でも出来そうな感じがするし。

レンヤ君は私の車椅子をベンチの隣まで運ぶと手を離し、ベンチに座つて隣に腰掛けた。

「それで、大丈夫だったか？高町さん」

「 なのは

「え？」

「なのははって呼んで。」

「大丈夫だったか？なのは」

「うん！」

名前で呼んでもらえた。ちょっとびり嬉しい。

「まあ、それは置いといてだ。何をそんなに必死にリハビリしてたんだ？」

「

「空飛べなくたって、誰も責めやしないぞ？」

「それは

いきなり核心を突いた会話に、私は動搖してしまつ。

確かに私は必死に いや、焦つてリハビリをしてしまつているんだと思う。飛べなくたって、誰も責めない。確かにそうだ、人間はもともと飛べるような生き物じやない。飛べなくても、なにも言われない。

「怖いのか？」

「ツ！？」

「怖いんだな。魔法が使えなくなつて、今ある関係がなくなつてしまつことだが。」

「ちが　　「本当か？」

「それは本心か？断言できるか？そんなことないつて。」

「

彼の言葉が　いや、彼の言葉だからこそ、私の折れそうな心を容赦なく責め立てていく。

元々、私が魔法を知ったのは偶然だった。とある事件で落っこちてきたユーノ君に協力して、偶然魔法を使えるようになつただけの少女。

それまでは、なんの取り柄もなくて、『レバーベビ』にでもこる、一人ぼっちの少女。

そんな一人ぼっちの私に、今の交友関係をくれたのは魔法だった。フェイトちゃんもはやてちゃんもヴィータちゃんも　　今いる沢山の友達は、魔法があつたからといつても過言ではない。

そんな私から魔法がなくなると、どうなるだらうか？それはちがうと今ここで断言できるだらうか？

怖い。

今の関係が崩れてしまつことが。

嫌だ。

昔の一人ぼっちにもどつてしまつのが。

「さて、少し俺のことを話そつか。」

「？」

そう言つて、彼は真剣でどこか寂しい目をして、話始めた。

「俺が犯罪をしている部隊にいたことは？」

「フェイトちゃん　友達から少し。」

「そつか、俺は元々孤児だつた。」

そして、聞いた。彼のことを。

レンヤ君のいた部隊は、上司が偉くなりたいがためにできた部隊で、人材はお金がないので孤児を連れてきていたらしい。犯罪なんて普通、生き残ればそれでよし。　人殺しの経験もあるそうだ。無理やりやらされた。それでレンヤ君は犯罪者扱いだつたのか。

だけれど、そんな部隊でも友達つてものはできるみたいで、レンヤ君にも何人か居たそうだ。

「それじゃあ、その友達はどうしてるの？」

「死んだよ。」

「え？」

「犯罪者の質量兵器に当たつて皆死んだ。」

「『めんなさい』

「別にいい。」

レンヤ君が言つには、自分は仲間の中でだったら恵まれていた方だったそうだ。運よく生き残つて、それでも新しい子供が増えて、また死んでいく。その繰り返し。

いつも隊のなかで一人。少し、ひとりぼっちだったの私に似ている。

「ちょっと、分かる気がする。怖かったんだろ？ 魔法が使えなくなるのが。」

「うん。」

「嫌だつたんだろ？一人に戻るのが。」

「うん、うん！」

「辛かつたんだろ？皆がいなくなつてしまつかもしないことが」

「うん。」

まるで私の全てを知つてゐるよつた気がして。私も彼が辛いのは理解できて。

彼の一言一言が、私の今にも泣いてしまいそうな涙腺を刺激していく。

そんな時、彼は私を抱きしめた。

暖かい。

「え？ええ？？」

「今は泣いとけ。我慢は良くないぞ。」

動搖している私を置いて、彼は話していく。限界だった。

「ふえ、ふええええん！！」

彼は、泣いている私の頭を撫で続けてくれた。

「泣き止んだか?」

うん、もう大丈夫なの。

「そつか。

私が泣き止んだのを確認すると、彼は撫でていた手を止めて、私が離れていく。

ちょつ
ぴり
残念かも。

「悩んだ時は友達を頼れ。きっと力になってくれる。」

うん。フロイトちゃんにもいろいろ語つてみるの。」

ま、いい友達をうだし、大丈夫だろ。」

「カワカミくん！…どこにいますかー？！」

彼と話していると、遠くから彼を呼ぶ看護士の声が聞こえてくる。

そんな声に彼は慌てて立ち上がり、こいを離れようとする。

「やつべー看護士がくるー。」

「頑張つて逃げてね。」

「くそつ、なのはは人事だからつて余裕そつこしゃがつてー！」

立ち上がつた彼は屋上と下の階に繋がる扉に向かって走り出した。

「レンヤ君ー。」

「ん？」

扉を開けた彼を私は叫んで呼び止める。直つておきたいことがあるから。

「なのははと友達になつてくれる？」

突然の言葉にしばし瞬きを繰り返した彼だが、やがてこつこつ笑つてこつと言つた。

「もう友達だらへん前で呼び合つてゐしなー。それと

「

「魔法なんてなくとも、俺達はずつと友達だからなー。」

その言葉が、私の中に響いた。多分これから一生忘れないと思う。

あーあ。今の私、顔が赤いだろうな。

「「」めーん、お待たせ。そろそろ病室に戻るわよ。それともリハビリする?」

今までどこかに行つっていた看護士さんが戻ってきて、私に問いかける。

「いえ、大丈夫です。」

「あれ? なのはちゃんあんなにリハビリ必死だつたじゃない。いいの?」

「はい。」

私の心境の変化に、看護士さんは戸惑い気味。今まで、一分一秒早く魔法が使えるようになりたかったけど、今は大丈夫。無茶はない。

魔法が使いたくないわけじゃない、ただ

「魔法なんてなくても、友達はいますから。」

いつも思ひ入るよくなつただけ。

無茶しても、友達が心配するだけだから。

「あーーーー? レンヤ君に謝つてないーーーー?」

「懲こらへつたのーー?」

私が彼に謝るのを忘れていて、思い出して一瞬の間の気が弱

話。

少女視点、フラグとか立ててみる（後書き）

本日の奴はコレで打ち止めです。

進む妄想が抑えられなかつたら、もう一話投下しちゃうかも。でも、期待しないでください。

主人公は、時と場所によつて似非敬語を使い分けます。基本的に誰にでもフランクです。

フラグ（笑）そんなに簡単に立たないから（笑）

誤字してき等お願いします。リクエストあれば、一応書つてください。検討はしてみます。ヒロインについても、後々アンケートなんかやってみようかと。

やってみたかったんだよね、アンケート。

長文失礼しました。

次元犯罪者とか逮捕してみる（前書き）

“いつも、いつも。本日3回目の投下です。

進の妄想を抑える」ことが出来ませんでした。ｗｗ

だが、自重しない。それが俺だから（キリッ

最後キャラ崩壊があるかも。

誤字に気をつけて読んでねつ

次元犯罪者とか逮捕してみる

撃墜事件から5年が経つた。

犯罪者更生部隊の任務で何度も死にかけたりしたけれど、何とかやつています。

そんなこんなで、そろそろ異動の時期。大丈夫だろうか？

魔法少女リリカルなのはStrikers始まります。

「エリアサーチを頼む。」

『範囲はどうしますか？』

「半径500mだ。」

俺の指示を聞き、俺のストレージデバイスがエリアサーチを行う。最低限のやり取りが可能なAIが入っているので、厳密にはストレージではないが、ストレージと大して変わらない。

今回の任務は管理外世界に逃げ込んだ次元犯罪者を追撃することだ。

現在俺の所属している部隊 犯罪者更生部隊の任務は主に次元犯罪者の逮捕。年中そばっかりやっている。目には目をつてやつだ。

俺の部隊に回されるような任務は、どれも優秀なエリート つまり現実を知らない生温い奴らに任せられないような酷い犯罪者を処分するものばかりだ。今回の犯罪者は人体実験を行っていた奴で、本拠地だった研究所には脳みそ輪切りにされた子供とか、臓器を引きずりだされて電極に繋がれたまま生かされている男とかがいた酷い奴で、投降の意思などまったくないみたいだ。

今回のような犯罪者のケースでは珍しく、本人もそこそこ強いという嫌がらせのような奴。

『右斜め前方457mに魔力反応あります。』

「了解。」

んー ここからじゃ確認できないな。廃ビルが邪魔だ。上に上がるか。

あ、言ってなかつたけど、この管理外世界、昔は人が住んでいたみたいで、廃ビルとかが残っている。

魔力で足場を作り、廃ビルの屋上まで駆け上がり、魔法の用意をする。

「長距離射撃で仕留めるか。セットアップ。」

『セットアップ。』

一瞬俺の魔力光である蒼色に光り、服装が変化する。デザインは黒が主な色の服。別段色に括ってはいなかつたが、夜の活動が多かつたので、黒になつた。因みに今は毎晩である。

スコープを覗き、狙いを定め、対象を確認する。どうやら、逃げ切つたと思っているようで、廃ビルの中で警戒もせず、のんきに休憩している。

「魔力圧縮開始、魔法陣展開及び魔力吸収発動。」

ライフルとなつたデバイスの銃口と足元から魔法陣が展開し、光りを放ちだす。因みに今回はミッド式の魔法だ。

周りに存在する微かな魔素を根こそぎ吸収し、溜めの動作に入る。

「カートリッジフルロード。」

『ロード カートリッジ。フルロード。』

6つのカートリッジが一気に排出され、今から使う魔法に魔力を上乗せする。

「一撃必中」

『ソニックショーター』

俺の声に反応して、デバイスが魔法を完成させる。反動に備え、肩の力を抜き、受け流す用意をしてトリガーを引いた。

放ったのは、圧縮に圧縮された小さな魔弾。されど、威力が小さいのではない。そもそも俺が求めるような大威力は、既存の砲撃魔法を使うと、魔力消費が多くすぎる。

だから、改良した。ソニックムーブなどの加速移動術式を変え、加速のみの術式を取り出し、射撃の魔法に応用する。速度は威力に繋がって、威力アップになるという訳だ。まあ、加速の魔法は、もともと多様していたから、そんなに苦労しなかつたけど。

「こちゅうカワカ!!。ターゲットの撃破を確認した。回収を頼む。」

『了解。』

取り合えず通信を繋げて、撃破を報告する。え? ターゲット? 眉間に打ちましたけど何か? 思ったより障壁硬くなかったしな。力一トリッジを無駄にしてしまった。それに、溜めの時間も無駄にしたな。

「お前、相変わらずしぶとく生き残ってるな。」

「 出合つて第一声がそれですか。」

俺が帰還して、取り合えず上司に報告しに行くと、出会い頭に文句を言われた。

「こゝは、犯罪者更生部隊の本部というか本拠地というか まあそんなん感じのところだ。」

いくら犯罪者で構成されているとはいって、そこそこ設備が揃っている。こゝの隊員は大抵犯罪者なので、無料奉仕が当たり前のところだけれど、衣・食・住は俺がいたところよりもマシだった。満足した食事にありつけるしな。

「大体、お前がいるせいで無駄に費用を使っているんだぞ。何とかしろ。」

「知りませんよ。文句をいうなら、俺をこゝに送りつけた上層部に言つてください。」

「それができたら苦労しねえ 」

俺の言葉に、上司は疲れたように机に突つ伏した。ざまあ。

ん？ なんで俺がいると無駄に費用を使うのかって？

ここ犯罪者更生部隊が自殺部隊だつてことは話したよな？ んで、任務に行くと大抵数回で死ぬ訳だ。自分の能力値以上に任務をやってるしな。

だから、食事とかそういうものがそこそこ高価な物が『えられるんだ。どうせ1週間くらいでいなくなる人材だしな。

だが俺は生きている。もともと、自分の能力値以上の力を出せるし、成長期だったこともあり、魔力値は上昇している。当時はBランクだったが、今はA+だ。それでも低いけど。

他の生き残った要因は、当時が陸戦だったのでもあるな。受ける任務はAA辺りだし。

「お前が来てもうそろそろ5年になるのか。意外と早いもんだねえ。」

「そんなことより報告です。」

「相変わらず堅い奴だな。」

「いえ、貴方が馬鹿なだけかと。」

「俺、お前の上司だからな！？」

そろそろ、俺がこの部隊に来てから5年である。要するに、この部隊からもおさらばってわけだ。

因みに、俺の馬鹿上司。あれでも有能な人材で、なんでこんなところにいるのか分からぬくらいだ。まあ、何かやらかしたか、有能な人材を使わないと、犯罪者なんて纏められないかのどっちかだな。

「今回の違法魔導師ですが、研究施設は破壊、本人は逃げたんで追撃後いつも通り回収してもらいました。」

「毎回思うんだけど、お前どうやってんの？」

この部隊、基本的に仕事をしているところの映像を撮らないことになっている。

撮れないことはないんだが、戦闘中の映像を撮つて元犯罪者の反感をかわないようにするのが目的だ。昔、映像を撮られてかなり怒つたやつがいたみたいで、いろいろと反逆されないように対策をとっているのに、それを突破しそうになるまで暴れたらしい。それ以降、映像は撮つていない。

お陰で、レアスキルについて隠すのが大分簡単になった。俺の戦闘情報は、前の部隊にいた頃のだけだろう。召喚師つてのは分かるだろ？が、魔力吸収については一切分からぬだろうな。秘密に飛ばしていくるサーチャーとかフィーに誤魔化してもらつてるし。

「馬鹿には理解できない方法です。」

「絶対俺を馬鹿にしてくるだろー。」

「馬鹿にだなんて ふつ」

「鼻で笑つた！？」

いやー、この上司こじるの面白こんだよねー。一タリアクションが大げさだし。

「それで、お前。陸と海、次はどうちに行くつもりなんだ？」

「間違いなく陸ですね。海には馬鹿ばっかですし。」

「いいのか？海でやつていける戦闘力があるなら、そつちのほうが昇進も早いし、給料も高いぞ？」

「それでも、馬鹿には付き合つてられませんね。引き抜かれたら仕事くらい真面目にしますけど。」

「やつぱり堅いぞ、お前。」

「思考がガツチガチの貴方に言われたくないません。馬鹿的な意味で。」

「くつ ーまあいい、続きだ。」

実際、海は馬鹿ばっかりである。いや、真面目なやつがいないわけではないが。

ロストロゴニアを見つければ、管理しなければだの、それは危険だだけの何かしらの理由を付けて強奪していく。封印するときも、失敗したり暴走したりしたら撤収して放置。落ち着いてから回収しにいくらしい。もうどちらが悪かわからないね。

その点、陸はちょっと危険な時もあるけど、馬鹿は少ない。大きな力をもつてないからか、自分がどの程度できて、どこからが無謀になるか、自分の実力を把握し身の程をきまでいる。管理局本局からはいろいろ言われてるけど、少なくとも、海の連中よりも有能だ。

「陸に行くなら、陸上警備隊に異動だと上から指示がきていく」

「陸上警備隊ですか　じつせ、ミリードの端つじでしょ？」

「よく分かったな。」

「よつまどお上は自分が嫌いみたいですね。昇進させたくないんじょ。」

「お前、何やらかしたんだ？」

「ちょっと、管理局お気に入りのエース様を傷物にしてしまっただけですよ。」

「お前つてときどき馬鹿やらかすよな。」

「貴方に言われるのは癪ですが、否定しません。」

「ふつ」

何だそのドヤ顔は。やめろ、殴り倒したくなる。

そもそも、俺だって好きで傷物にしてしまったわけじゃねえ。そういうことになってしまっただけだ。

まあ、馬鹿やらかしたのは否定しないけど。

「それで、異動はいつすれば？」

「明日だ。」

「すいません、聞き取れなかつたんですが。糞虫。」

「だから、明日だつて言つてるだろ。あと、糞虫つて。絶対聞こえてただろ！？」

「ああ、すいません。思つていたことがつじ。わざとです。」

「誤魔化せないからなーー。」

「やつ思われたくなかったら、何で今頃教えたんですか。」

「や、それは
」

異動の通達は、数週間前には来る筈である。しかも、今回はまだ海と陸のどちらかすら決めてなかつたのだ。それなのに明日とかおかしそぎる。

「いつ、何か隠してる？」

「からだ」

「？。聞こえませんでした。もう一度言つてください。」

「通知に涎を垂らして読めなくなつていたからだ！悪いか！」

「一度死んで」

「ぐぼふあッ」

悪は滅びた。

「どうか、あり得ないだろ。部下の異動通知に居眠りして涎を垂らすとか。なに考えてんだ？」

「うせ本来なら陸にしか異動出来なかつたんだろうな。俺が海と答えたならどうするつもりだつたんだ？まあ、天地がひっくり返つてもあり得ないけど。

それを言つたら、俺はそつと嘲り思つてたとか言つて調子にのるか

「いや、言わない。

「それじゃあ、失礼しました。糞上司。精々頑張ってください。こつちは誰かさんのせいでの準備がありますんで。」

俺は返事も聞かずに、机で悶えている変態を放置して自室へ向かう。

はあ　　今夜は徹夜かなあ。あ、あとで時間とか聞いたとかないと。またアイツに会わないといけないのか。鬱だ。

～ある日のなのはな～

「ディバイーンバスター――――――!

「グワアアアアアツツ！？」

私のバインドからのディバインバスターを受けて次元犯罪者が撃墜される。

そして、こつもの」とをやつしますか。

「次元犯罪者やーん」

「くそつーーー！ こんな小娘につ！ 何だよ、笑いにきたのかよ」

「ちょーーつと違うね。犯罪者更生部隊のカワカミって人知つてる？」

「カワカミだあ？ ああ、だいぶん前に同じ仕事してた奴で、捕まつたのにそんな奴がいたな」

よし、今回は当たりだ。たまにいるんだよね、レンヤ君のこと知つている次元犯罪者が。

「教えて。」

「はあ？ てめえ何言つてんだ？ なんこと教えるわけ？？？ 「チャキ」
へ？」

「その人の」と教えてくれる？」

「よし、分かつた。話すから、ちよつと待つんだ。だから、その収束砲をゆつぐり下ろしそうか」

「ディバイーンバスター————！」

「えーー？ そこ撃つといひのーー？ あが、みせやああああーー？」

「はやで、はやで」

「ん？ ああ、フュイトちゃんか。どないしたんや？」

「なのはが次元犯罪者を捕まえた後、笑顔で帰つてくるんだけど。」

「

「最近は鼻歌まで歌つてて。捕まえられた犯罪者は『砲撃怖い、収束砲怖い。悪魔だ。』って繰り返し喚いているんだって。私、何かした方がいいのかな？」

「そつとしておくんや、フュイトちゃん。人にはそれぞれ性癖つてもんがあるんや。友達なら受け入れるべきや。」

「そつなの？」

「聞こえてるからね！？はやでちゃん！――！」

そんな日常。

次元犯罪者とか逮捕してみる（後書き）

またつまらぬものを書いてしまった。アーッ！

なんかゴメン。

とこう訳で、6話でした。

何か、この小説、思ったより凄いことになってますね。気がついたら口間9位というwww

誰だこんな小説読んでる暇人はwww嬉しいですけどwww貴方が同志かwww

とこうわけで、いつも通り誤字指摘お願いしますwww

陸上警備隊とかしてみる（前書き）

本日分の小説投下です。

いや～予約機能を使って投稿してみました。

何か先に仕事終わらせたみたいで、俺できる奴感に満足。

陸士警備隊とかしてみる

陸士警備隊に異動になつた俺。

上司は苦手な奴になつたし、口を使われるし、ロッコン多め。

ほんと、上手くやつてこられるかなあ。

でも、きちんと仕事をこなして見せる。

魔法少女リリカルなのはStrikerS始まります。

「なのはさんが一番に決まつてんだろー?あの幼さ残る可愛さが理解できないのか!?!?」

「はつ! フュイトさんに決まつてる! あの凛とした美しさが分かんねえのか!?!?」

「んだと! リア! ...」

「殺んのか! リア! ...?」

どいつも、陸上警備隊に異動になつたレンヤです。

最近は、なのはファンの不良グループとフェイトさんファンの不良グループの争いがよく勃発しています。いい歳になつて16歳の少女で騒ぎやがつて。ロリコンか貴様ら。

陸上警備隊に来て一週間経ちますが、仕事は不良の鎮火ばかり。どうやら細菌の「ホン。失礼。最近の不良はハイスペックのようで、魔法を使ってくるので、魔導師があまり多くない陸では困つているとか。

だから、魔導師の それもソコソコ実力のある俺は、戦力として重宝されています。お陰で、他の担当地区まで行つたりと、四六時中働いてばかり 残業代くらいよこせ!!

「はいはい、そこの君達。注目へ！」

「ああん？」

「何だ、この餓鬼？」

おー、怖い怖い（笑）

モヒカンいるよ、モヒカン（笑）絶滅してなかつたんだ。

「陸上警備隊所属のレンヤ・カワカミ 二等陸士だ。通報を受けてやつて來た。大人しくお縄につきやがれ。」

「「ブワッハッハハッ！！」」

「 何だ？面白いことでもあつたか？」

「急に笑い出しあがつて。まあ、大体予想はつくけど。モヒカンの癖に生意氣な。

「こんな餓鬼が陸上警備隊！管理局の人材不足も深刻なんだな！」

「はいはい、ロリコン。いいから大人しく捕まつとけ。痛い目にあいたくなかったらな。」

「「んだとー？」」

俺のやつすい挑発に怒つてそれぞれの武器を俺に向ける。何種類かの魔力光が混ざり合つたようか光が発生し、不良たちの服装が、痛々しい文字が書かれた服装に変わる。

俺様最強つて（笑）サイキヨーーの間違いだろ（笑）

「てめえの敗因はたつた一つ。お前は俺を怒らせた。」

「つか―――！冗貴カツコいい――！」

「つーてめえ、俺の台詞取るんじゃねえ――！」

不良の言葉と共に、魔力がデバイスに収束していく。ニシド式の魔法を使つてゐみたいだ。

つてか収束率ショボい（笑）コレは酷い。

「カタストロフブレイカー――！」

不良のデバイスからめっちゃ細いレーザーが放たれた。

コレでブレイカーとか名前負けにも程がある。名前が厨二すぎる。誰だよ、なのはのスターライトでも真似したつもりか。

「ほい」

「バチツ！」

「「なつ――？」」

取りあえず、魔力を纏つた手で弾いておいた。痛くも痒くもないな。

「セットアップ」

『セットアップ』

今度は俺の服装がいつも黒いバリアジャケットに変わる。こうしないと、デバイスの処理能力が限界まで引き出せないしね。

「杜撰だな。外側に対して気を回しつていなければ簡単に割り込まれるんだよ」

それ、なんて禁書目録？

「んだとー?」

「術式の構成が甘い。収束率が低い。そんな魔法に割り込んで打ち消すくらい簡単だ。」

実際、そんなに簡単なことじゃないけどね。ある程度実力があるとできないし。

「舐めやがつてつー！」

「森羅万象の翁 汝の審判を仰ぐ????」

「「「...」」」

俺の眼前に召喚魔法の魔法陣が出現し、蒼色に光を放ち始める。

こいつは魔力は大体こぐらいの消費だからな。A+になつた今、多少の戦闘には単独で召喚できるようになつた。

「現れろ『ラムウ』」

『コールサモンラムウ』

出てきたのは老人の魔導師。これでもFFの召喚獣である。杖を持ち、バチバチと電気を飛ばしている。

二二

ん? どうしたんだ? 肩なんか震わせて?

「アッハハハハハツ」

でよ。召喚したみたい、出されたのがちやんです
もんねー。普通やつなるわ。

「何かと思つたらジジイかよー！」
「ブ、ブハハッハ死ぬー！」

「おたかみ士官、お織りやんではなかー？」

7

決めた。手加減してやううと思つたけど、我慢の限界だわ。 非
殺傷設定だからイイヨネ？

「おー、お前ら。」

俺の感情に呼応するかのように、ラムウは杖を持つて『手を掲げた。

次の瞬間？？？？？

ズガアアアアンツツツ！－－！

真っ白い閃光が、視界いっぱいに広がった。

あれ？ラムウさん怒つてらつしやる？魔力が余分に持つていか
れたけど、気のせいだよね？だよね？

落雷の着弾地点の道路は焦げて抉り取られている。よかつた一結界
張つておいて。危うく俺の力がバレるところだつたぜ。

「 」

あまりの光景に、空いた口が塞がらない不良達。

正気に返った不良達は一斉に口を開き始めた。

「待つてくれ、俺たちが悪かつた。争いはもうしない、だからそれだけはっ！」

「管理局員 いや、兄貴！管理局は市民を守るもにだろ！？だよなー！もちろん、俺もそうだ！俺は一生兄貴に着いて行きますー！」

「俺も！」「俺もだ！！」「俺だつて！」

なるほど。お前達の言いたい事はよく分かつた。」

ふつゝ、希望に満ちた顔をしているな。

駄菓子菓子！お前達不良の運命は、何をしたつすでに決まっていたのだよ！

「だが断る！」

「「「「なつ！？」

不良達に動搖が走り、希望に満ちた顔が絶望に変わった。

ふつ、
わわわ。

「お前達は私情の為に回りの住民に迷惑をかけた！それなのに、ごめんなさいと言つたら、はこうですか。で済むと思つてんのか！？ああー！」

「「「「そ、それは

「自分の為に動いてんじゃねえぞー！」

Г Г Г Г

「そして何より

—
—
—
—
—

「俺の貴重な睡眠時間を奪つてんじゃねえぞーーー！」

「あんたもメツチャ私情で動いてるだろ！……！」

んだよ。いちどら残業に続く残業で疲れてるんだよーー寝るときぐらーいそつとしてくれよーー！

やつと踊りについたら、真夜中に呼び出しだぞ！理不尽過ぎるわ！
つづ一わけで、不良にまかせ慷慨晴らしの的になつてもらいまーす。ハ
つ当たりとも言つ。

「どうわけで、的になつてくれ。拒否権ないけどね。」

俺の意思を汲み取つて、ラムウが魔力を溜め始める。いつちよやるか。

「蹴散らせ、『裁きの雷』」

再び、視界を白に染め上げた。

「いやー、すまないね。こんな真夜中に出勤してもらつて。」

「 そつ思つなら残業代くらいくださー」

「無理な相談だね」

「ですよね~。」

場所は変わつてミッドの端にある陸上警備隊の支部。ミッドは意外と広いので、支部が街中に幾つか存在している。これは中央からもつとも遠いところだ。

犯罪者なんてめつたに出ないし、昇進は先ずないと思つていいだろう。

支部長は、眼鏡を掛けたイケメンフェイスの優男である。結婚しているらしい。美人な嫁さんと娘が家で待ってるらしい。モテるらしい。

イケメン爆発しろ。

「報告ですが、通報現場では魔導師の不良同士で言い争って、今にも戦闘が始まろうとしてました。」

「むふむふ、それで？」

「接触したら魔法を使つてきたので、反撃し捕縛。近くにいた警備隊に引き渡してこひらこきました」

「そうかい　ご苦労様。お茶でも飲むかい？」

「いえ、結構です。男と飲む趣味はありません。何より寝たいです。誰かさんのせいです、ろくに寝てませんからね！」

「やれやれ　。。。随分と嫌われてしまつたものだ。　ところで、誰と寝るんだい？」

「嫌味か！？嫌味だな！－－嫌味ですね！－－イケメン爆発しろ！－－！」

「ふつ」

「うわーんつ－－－覚えてるよ－－－ツ－－！」

そつと聞いて俺は、部屋から走り去った。

けして逃げたんじゃない。絶対に。違うたら、違う。戦略的撤退なんだ。

言つて悲しくなつてきた。

「またある日のなのはさと~

「なあ、はやで。なのはの奴、何であんなに機嫌がいいんだ?」

「あ、ヴィータ。何や、居たんや?」

「主、私も居ます。」

「シグナムも! 気付かんかったわ~」

「そんなこといいから、なのはの奴何であんなに機嫌がいいんだ?」

「ヴィータ、この世は、知りんまうがええ」とも沢山あるんや。気にしちやあかんで」

「はやてが眞づくなり知らない方がいいんだなー。」

「おー、おーおー」

「 実のところどうなんですか? 主。」

「あんな、実はのはちやんに隠された性へと「隠」してゐるよー。はやてちやん…」「うー?」

もう、はやてちやんはちょっと田話をした隙に口に向だから。一度キチンとお話をほづがこいのかな?

そりやー確かに、犯人が吹き飛ぶのは爽快だけど それといふは違つからねー?

「流石の私も、それ以上は怒つちやうよー。」

「まあまあ、なのはちやん。冗談やないか。友達ならそれくらい寛容にならへんと、モテへんで?」

「また、やうやつて誤魔化してーはやてちやんがそつするなひ、口ツチにだつて考えがあるかー。」

「何やへ…眞づみこせ」

「自分でけつアンクラブがなかつたのを眞づしていた」とを眞づふらつてやるーーーーー!」

「ちよ、なのはちやん! ?

そう言つたら後、私は走り去つた。後ろから、

「主にこどもたちがおもてなしをよこす」

「はやて 意外と気にしてたんだな。」

「ちょ、誤解や一人とも……そんな」と思つてへんから、その生暖かい視線をやめに……」

「アサヒ」

とか聞こえてきたけど、関係ないつたら関係ないつ！

そんな日常（笑）

陸上警備隊とかしてみる（後書き）

どうでしたか？主人公はシリアルスなときはシリアルスに頑張りますけど、それ以外では普通にはつちやけてます（笑）

はやてファンクラブ　勿論、ありますよ？ただ彼女が気づいていないだけです。

そして、いつも通り誤字の指摘などお願いします。修正入るのは遅れそうですね。

少女視点、不良とか撃退してみる（前書き）

ふつ、なのは視点と思うか。

駄菓子菓子！ 今回は違う！ 僕つてば何がしたかったのか分からぬ。
そんなお話。

キャラ崩壊とかあるから駄目な人は見ないほうがいいかも。

それではどうぞ 丶

少女視点、不良とか撃退してみる

空港での火災があつて、私がなのはさんに救出されてから約1年の月日がたつた。

このままじゃ駄目だつて思つて、カッコいいなのはさんに憧れて、私は陸士訓練校に入学した。

私の戦い方は特殊だから、自分でデバイスを組んで、それで出会つた新たな友達。

これから頑張つていこうと思ひます。

魔法少女リリカルなのはStrikers始まります。

「ねえ、ティア。ティア！」

「何よ、五月蠅いわねえ。もう少し大人しくできないわけ？　あと、ティアつて何よ？」

「えへへ、あだ名！ティアナだからティア！」

「あだ名って 略す程長い名前じゃないでしょ？あたしの名前は

「駄目 かな？」

「 分かつた、分かつたわ好きにしなさい。だからそんな顔しないの。」

「えへへ、ありがとう！ティア！」

「まったく 調子狂うわねえ」

私と陸士訓練校で知り合った、ティアは休みの日である今日を利用して、ミッドチルダ中央に来ています。

何でかつて言つと、え~っと確かデバイスの銃に使うパーツを取り替えたいんだって。私には、そういう小難しいことはよく分からないんだけど、撃ち手の人によつて癖とかがあるから、それに合わせてパーツを調整するつて言つてた。

私は、お姉ちゃんに教わりながらやつたから、軽いメンテナンス程度しか分からないんだけどねえ。

「ちょっと、スバル！？どっちに行つてんのー。デバイスのパーツを売つてるのはそっちじゃなくて、こっちよー。」

「『メン、『メン。道忘れちやつた！』

「まったく、何やつてんのよ。そのデバイス、どうやって組み立てたわけ？パーべくらい買いに行つたでしょ？」

「私の使つてゐる『デバイスのパーティ』は、全部家にあつたの使つてたから。足りないものは、お父さんが買って来てくれたし！」

「あんたの親つて、意外に過保護よね。厳しそうな顔に似合わす。」「

確かに、私のお父さんはちょっといや、かなり過保護かもだけど。でもでも、いい人何だよ。」

ティアナの言つ通り、ちょっと厳しいけどね。

「で、デバイスのパーティ売つてて、どうだっけ？」

「次の角を左よ。そのまま真っ直ぐに進んだら、看板が見えてくわわ。」

「よし、じゃあ急いで行こう。」

「ひょ、待なさいよ！ そんなに走らなへてもお店は逃げないわよ！」

ティアが後ろで叫んでいた気がするけど、大丈夫でしょ。一々嫌がる素振りとか、文句とか言つてくるけど、けやんと付き合つてくれるもの！

そう言つのが、ティアの良いところなんだと思う。えつと確かそつと云うのを つんぐれつていうんだっけ。

「到着――」

多分、ここで良いんだと思う。外に、デバイスを組む時に見たことがあるパートがあつたから。

「ちょっと す、スバル。 あんた走るの は、速すぎよ。」

ちょっとしたら、ティアもこのお店にやつて来た。やつぱり――で合つていたみたいだ。

ティアは凄いゼエゼエいつて息切れしてゐるけど、大丈夫かな？

「ティア、大丈夫？」

「だ、誰のせいよ 誰の。」

「ん、ゴメン。」

「べ、別にいいわよ。それにあんた 謝つてばっかりね。」

うう 仕方ないじゃない。1年くらい前まで、人見知りする性格だつたんだし。その時の癖つていうか、名残りつていうか 反射的に謝つちゃうんだもん。

「それよりティア、見て回らないの？」

「ちよつと休憩よ。休憩。あんたは見て回つてれば?」

「うん、『ゴメンね、ティア。』

「 また謝つてる。」

「 あう

私はその場に居るのが恥ずかしくなつて、早足で立ち去つた。

私は特に何か欲しいデバイスのバーツがあるわけじゃないけど、見て回ることにした。

えつと、ローラー、ローラー それくらいしか分からんだけ
どねつ

「うわあ～」

ローラー売り場を見つけると、~~わいせつ~~思つていた以上にローラーの数があつた。

あ、ローラーって言つても、色々種類があるんだ 確かに、よく考えればそうだよね。何もローラーの使用用途はローラーシューズだけじゃないもんね。

えつと どれがいいのかな?

「 あ

そんな私の目に止まつたのが一つのローラーだった。

「摩擦軽減、高魔力伝導率、ブレーキのし易さ　これいいかも。
えっと値段はつと　　げ

た、高い　学生にこの値段は高すぎるよう。なんでこんなにデバ
イスのパーツの値段は高いんだろう?」

これだけあれば、アイスが幾つ買えることやら　　とほほ。

「スバルー? あたしの買い物は終わつたけど、何かいいものでも
どうしたの?」

私が絶望に打ちひしがれていると、ティアナがやつて来て、私に声
をかけてきた。「う、これには訳があるんだよう。

取り合えず意思表示をする為に、無言でやつてのローラーを指差す。

「何々　うつわ高いわねえ　　流石使用率の低いローラー。」

「大人の社会つて厳しいんだね　　」

「ま、買えないものはしょうがないわ。ほらスバル、さつさと帰ん
ないと、日が暮れるわよ?」

「あーうー　。あたしのローラー　　」

「はいはい、お店の邪魔しないの。」

そう言られて、私はティアに引っ張られて出て行きました。欲しかったなあつ

「ねえ、ティア。」

「何よ？馬鹿スバル。」

私は帰り道を通りながら、隣にいるティアに話しかけた。

「ティアはさ　将来成りたいものとかつてある？」

「どうしたの？急にそんなこと言いだして。」

「聞いてみたかっただけつ

「あつやつ。」

ティアはそう言つて一歩立ち止まつていた足を動かして歩き始めた。

私も置いていかれないように着いて行く。

「私は そうねえ。 執務官に成りたいわね。」

「うわっ！あの勉強ばっかりの、頭いいやつー？」

「何よ？何か文句でもあるの？」

「ううん。 テイアらしいなあって。」

ティアは何か頭をよく使う仕事につきやうだしねー。 私には、到底無理な職業だけビ。

性格的に合わないというか 頭より体といつか 考えるより先に手が出ちゃう！みたいな？

執務官かあ テイアらしいなあ。

「モーゆーあんたはどうなのよ。」

「へ？私！？」

「うう。」

「私は やつぱり、なのはさんみみたいなカッコいい魔導師になりたい！その後は よくわかんないや」

なのはさんみみたいな魔導師になつて、その後私はどうするんだろうなあ。陸士隊かもしけないし、教導隊に入つてみるのもいいかもしかい。何だつたら?????

「ちよつとスバル！前！前！」

「え？」

「んっ、と何かにぶつかるような感触がして、田の前を見ると、いかにも不良って感じの男の人達がいた。

「痛つてえなあ、ねい。何してられちゃつてんの？」

「ノーメンなさこつ……前見てなくて、すみませんー。」

「ああ？ノーメンですんだら警備隊いらぬいの。分かる？」

「すみませんー。」

「あう、だつたらどうしたらいいのー？」

「おこ、よく見ひよ。ノーメン、小つちやいが、よく見たひソノソノ
可愛くねえか？」

「確かに　おい、嬢ちゃん。ちよつと付か合ひよ」

「え？」

「こから卑く」こつー。」

「 さやあつーー！」

男の人に乱暴に腕を引っ張られる。でも、着いて行くと何されるか分からぬから私は抵抗した。

そうしてると、横からティアが割り込んで来た。

「 ちよつと、よしなせいよ。嫌がつてるでしょー！」

「 ああん？ んだオメハ？ 「イツの連れか？」

「 せうよ、嫌だつて言つてんだから、せうせうどじつかに行きなさいつ！」

「 てめつ、調子にのりやがつてー丁度いい、人数合わせだ。お前もこいつ」

そう言つて、不良がティアに手を伸ばし、掴もうとしたその時？？？

「 エクスカッリバー エクスカッリバー 」

「 」

何か2人の間を変なナマモノが通り過ぎて行つた。気まずい沈黙が

流れる。

白く長い顔をしていて、死んだ魚のよつな目をしている。シルクハツトをかぶつていて、手に持つステッキを不良に向けてこう言った。

「私に接近を許すとは ヴァカめ！――！」

「――（ハ、ウゼエ――）」「――」

多分、ここにいる全員が同じことを思ったと思つた。

「おに何だよ？？」「私の伝説は十一世紀から始ました。」「は？」

「聞きたいかね？私の伝説を。」

「んなモンし？？」「ヴァカめ！――君に選択する権利はない！私の伝説は十一世紀から始ましたのだ！――」　ウゼエ。

謎のイラつく生物は不良の田の前までくると、持つてているステッキを田の前に押しつけ、ふりふり左右に振り始めた。

「だあつ――！邪魔だ！目の前でんなもん振り回すな！――ちよ、何で激しく振りやがる――やめ「ヴァカめ！――」ウゼエエエ――！」

「ちょっと不良に同情するかも。助けないけど。

あまりのウザさに殴りかかった不良だが、ナマモノに避けられてしまつた。避けたナマモノは、今度は何やら紙を突き出して來た。何なのかな？

「私の職人になるにあたつて、守つてもらいたいことが1000項あるー！そのレポートに纏めておいた。毎日を通しておべつて！」

「は？」

「うわあ本当だ。裏までビッシリ書いてある

「452時間目の私の5時間に及ぶ『朗読会』には是非とも参加願いたい。」

「誰がするか！……あつ『リ待て！……つてへブ！？』

ナマモノは去り際に不良の頭に紙を押しつけ、唐突にその場から消えた。

頭から紙をとつたを読んでフルフルと肩を震わせた不良は、「あの野郎殺す！…！」といつて仲間と共にどつかに行つた。

「助かったの？」

「ええ、そう見たいね 瘡だけど。つてうわあー。」

さて、帰らつか、という時に、再び唐突にあのナマモノが現れた。

「む、ムカつくナマモノ！！」

「　　ムカつくナマモノとは酷いな。助けてやつたのに。まあ意図してやつたけど。」

「へ？」

次の瞬間、ナマモノは消えて、変わりに男の人が現れた。

「陸士警備隊のレンヤ・カワカミだ。大丈夫だつたか？」

「えつと、やつるのは？」

「ん？ 幻術に決まってるだろ？」

「　　えええええ！？」

私達の声は、ミシヂの空によく響いていた。

まさか人だつたなんて

「す、すいません！ わざわざ助けていただいたのに失礼なこと言つて！！」

「　いや、別にいいけどな。俺が好きでやつたことだし。何より

そう見えたよ！ひたすらやつてたし。」

「け、けど」

「はーい、この話は終了ーーんで、お前さん達名前は？」

「あ、はい。スバル・ナカジマです！陸士訓練校に在学中です！」

「ティアナ・ランスターです。同じく陸士訓練校に在学中です。助けていただきありがとうございました！」

「ちょー？ ティア何か棘のある言い方だな。せつかく助けてもらつたのに。まあ、あれはムカついたかもだけど。

「ランスターにナカジマだな そつか、君達が ん？」

カワカミさんは何か私達に関する話を言いかけて、急に黙つて空を見だした。

「…………了解しました。つと、すまねえな。仕事が入った。さつきの奴らが暴れてるみたいだわ。半分俺のせいだし、行ってくるわ。」

半分つていうか、全部だとしつけど。私達助けるためにやつてくれたことだし、とやかく言えないんだけどね。

「じゃあーなーーー！」

そういう残して、不良が追っかけていった方に、カワカミさんは走つていた。

「なんか、嵐みたいな人だったね。ティア。」

「そうね。」

あれ？ティアはなんだかご機嫌斜め？

今度会つたら、カワカミさんはきちんとお礼をしないとね！

（オマケ）

「ねえ、ティア」

「何よ、急に。」

「不良に押し付けてた紙って、何て書いてあったのかな？」

「はい、これ。」

「えー？持つてきてたのー？」

「まあね、気になるじゃない。」

「それもやうだね えつと 」

『ヴァカめーーー』のロココンどもがツーーー

少女視点、不良とか撃退してみる（後書き）

8話終了です。

まさかのズバルとティアナのファーストコンタクト。ナマモノもといエクスカリバーにより印象付けることに成功。フラグは立てるか分からん。

ティアナさんが最後に不機嫌だったのは、いつもの持病（私つて才能ない凡人病）が発症したからです。今回は幻術ですね。

そもそも、幻術で完全に姿を変えるのは高等技術って設定です。蜃気楼的なシルエットならまだしも、完全に姿を変えるには恐ろしいほどの魔力コントロールが必要なんです。変身魔法ならまだしも。

あ、因みに主人公は、魔力吸収のお陰で魔力コントロールめちゃくちゃ上手いです。

なんかこの小説、総合評価が凄いことになつてますね？学校から帰ってきて画面を見ると1位の文字。見間違えかと思いましたよ。嬉しかつたんですけど。

まあ、テンションがゲージ振り切つたんで、打ち止めだったはずがもう一話書いてしまつた。その結果がこれである。

誤字指摘等お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0919z/>

魔法少女の世界に転生とかしてみる

2011年12月5日22時54分発行